

真夜中のセロリの茎
目次

かき氷で酔ってみろ 7

駐車場で捨てた男 31

真夜中のセロリの茎 59

三種類の桃のデザート 79

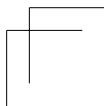
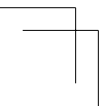
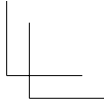
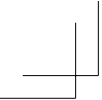
あまりにも可哀相 121

雨よ、降れ降れ 147

塩らつきょうの右隣 201

あとがき 226

真夜中のセロリの茎



かき氷で酔ってみろ

開局したときからほぼそのままそこにある狭い調整室だ。その奥で事務用の椅子にすわった木島竜太郎は、背もたれを深くうしろに倒し、ステイールの塵箱の縁にコイン・ローファアの踵を置き、固定電話の外線で電話をかけた。そのスタジオにはいま彼の他に人はいなかった。電話の相手はすぐに出た。

「はい」

とだけ、いつものように気のない口調で言う剣崎竜二に、

「おれだよ、元気かよ、この暑さだぜ」

と、木島は陽気に言った。

「元気だよ」

剣崎は答えた。

「暑さは平気か」

「大歓迎」

「そうか、それは安心だ。俺よりいくつ若いんだっけ？」

「三つ」

「三つか、たいしたことないな。しかし、三つは三つだ。俺はめでたく五十のなかばを越えたよ。今年の梅雨明けに。五十面の後半だよ。しっかり下げなくちゃいけない。間違っても掲え上げちゃいけないんだってよ」

「思いつきり下げてくれ」

剣崎の言葉に木島は笑った。

「思いつきりつうのは、どのあたりまでだ」

という自分の言葉を、

「まあいいや」

と軽く否定し、

「こんな話をしてると、きりがないと
言った。」

「続けてくれよ」

「まあ、いいさ。電話した理由は、この暑さと関係している、と言えなくもない。かき氷を食おう。来週の水曜日。おそらく真夏日だよ。その日の午後。その日は、かき氷の日なんだ」

「かき氷を食いたい気分の日、ということか」
剣崎が素っ気なく言った。

木島竜太郎はこのラジオ局でいくつかの番組のディレクターと営業を兼務して現役だ。剣崎竜二は作家だ。おたがいにまだ二十代の青年だった頃、この局で当時はいちばん若いディレクターだった木島の番組に、剣崎は外部の番組構成員として参加していた。仕事は何年か続いた。ふたりの親友どうしとしてのつきあいは、それ以来のものだ。

「かき氷の日、というものがあるんだ」と、木島は言った。

「日本かき氷協会という組織が、その佳き日を選んで、かき氷の日に制定した」

「ほんとにかよ」

「俺はお前みたいな嘘八百の作家と違って、ほんとだけで生きている。ほんとだけで世を渡ると、世間は年とともに確実に狭くなっていくな」

電話の向こうで剣崎は木島の言葉に笑った。

「来週、水曜日、かき氷の日の午後、かき氷はどうだ」

「食おう」

「そこで提案だけど、真夏のかき氷にふさわしい店を知らないか。俺がいつも徘徊しているのあたりには、昔ながらのかき氷は、もうないんだ。お洒落な器に入ったフラッペなんだよ、しかも見るからに妙なトッピングが載っかってる」

「なるほど」

「お前の住んでるところは、都心のここから見ると、どこかの地方都市だよ。新宿から下手すりゃ一時間だろう」

「急行で四十五分」

「乗り換えでもたつきや、おなじようなもんだ。つまりそこは田舎だから、昔懐かしいかき氷の店が残ってやしねえか、ということさ」

「あるよ」

「だったら俺は、ここからそこまで、喜んでいくよ」

「急行で来てくれ。快速急行でもいい。駅から五、六分歩くと、昭和をいまだに体現する、一軒の食堂がある」

「食堂か。俺の実家が、いまでも食堂だよ。お前も何度か来て食ったな」

「木造平屋建て、築四十五年くらいか。おそらく地元の大工が造った建物で、ドアの上に半円形に細い鉄棒が張り出し、それは白い暖簾のカーテン・レールさ。窓枠やドア枠はすべて木製で、緑色に塗ってある。それ以外は白。昭和の景色だよ」

「そこがいい」

「テーブルには赤と白の格子縞の、ヴィニールのクロスがかかっている」

「煙草の焼け焦げの跡が、そこにアクセントか」

「店の前に氷の旗が出ている」

「水曜日はひよっとしたら定休じゃねえのか」

「年中無休」

「お盆休みは？」

という木島の質問に、

「まだ早いだろう」

と、剣崎は答えた。

「しかし確認はしておく」

「お前はこの暑さは平気だという話は、さっきしたな。俺も暑いのはいつこうに苦にならないが、寒いのはお手上げだ。夏だって北へはいきたくない。東京からいちばん北へいったのは、宇都宮だからな。以前、宇都宮に彼女がいてさ。お前もいつしよに何度か飯を食った」

「覚えてる」

「そんな話はどうでもいいとして、では来週だ、水曜日」

待ち合わせの時間をきめたあと、その場所を剣崎は木島に丁寧に説明し、木島はキュー・シートの裏に要点を書き取った。

2

剣崎竜二とかき氷を食べた二日後の金曜日には、猛暑の炎天がまだ続いていた。その日の午後三時過ぎ、ラジオ番組のスポンサー探しの営業で訪ねたスピーカーの製作会社からの帰路、東京の北東のはずれと言っている、彼にとっては初めて来る地域の、地下鉄の駅まであと七、八分のところを、木島竜太郎はひとり歩いてきた。おなじラジオ局に勤める赤坂という若い女性と、ばったり会った。心底驚いて木島は炎天のなかに立ちどまった。

「すっげえいい脚のお姐ちゃんが、文字どおりのショート・パンツで歩いて来るなあ、さすがはこの猛暑だと思ったら、赤坂じゃねえか」

「こんなところで」

「こっちが言いたいよ。生まれて初めて来るところだよ、ここは。そのここで赤坂は、いったいなにしてんだ」

「この近くに住んでます。金曜日が休み」

「土日は？」

「なにもなければ休めます」

「そして金曜日も」

木島の言葉に赤坂は笑った。

「毎週、三連休か」

「そうも言えます」